

「文脈関連」と「ノだ」との相関 — 応答文における必須の「ノだ」

Yung Pui King

1. はじめに

日本語の平叙文の文末には「ノだ」や「ノです」といった形式がよく見られる〔注1〕（日常会話の中で「ノ」が「ン」に変わることもあるが、本稿ではこれらの文末形式を全部「ノだ」で代表させて呼ぶ）。一対一の対話の場合、相手の質問文や確認文に対し、どのような返事をすれば「ノだ」を用いた方がより自然になり、言ってみれば「ノだ」が「必須」になるかは、日本語学習者にとって興味深い問題であるが、実際それに関する研究はまだ少ない〔注2、注3〕。「ノだ」の働きについては、寺村(1984)や小金丸(1990)が「ノだ」には前接命題と先行文脈や状況とが関連していることを示す「結びつけ」機能があるということを既に主張しているが、実際「ノだ」で提出した命題と先行文との「文脈関連」によって「ノだ」の必要性がどのように変わってくるかについては触れていない〔注4、注5〕。また、「確認」(佐治1981)や「真命題」(水野1990)、「客観的な事実」(草薙1991)、「既定」の「背後の事情」(田野村1990)などを表すのが「ノだ」の本質だとする説もあるが、それらの説では納まりきれない「文脈関連」を表す「ノだ」があるということは案外記述されていない。本稿では、先行研究を補いながら、質問文と確認文に対する応答文を対象に「文脈関連」と「ノだ」との相関についてさらに調べていき、①「文脈関連」を示すためにどのような応答文に「ノだ」が必須になるのか、また、②そういった「ノだ」に最も鮮明に見られる「結びつけ」機能とはどのようなものなのか、という二点について考察する。

2. 研究方法

まずは、「文脈関連」と「ノだ」との相関を見るために、次のような基準に基づいて、

「ノだ」文による応答文を先行文との関連がより直接的な答えとより間接的な答えとに分けてみる。

- (1) 直接的な答えとは、質問や確認文によって要求されている反応や情報を即座にしかも単純に示す発話であり、先行文と明白に結びつくものである。先行文と同じレベルや前提、構文または言葉で答えるのがその典型である。
- (2) 間接的な答えとは、質問や確認文で要求されている反応や情報をすぐにまたは単純に示さない発話で、先行文と直接かみ合わないまたははつきりとながらないものである。先行文と違うレベルや前提、構文または言葉で答えるのがその類である。

次に、この二種類の応答文に用いられた「ノだ」の必要性について考察するが、本稿では基本的には寺村(1984)や小金丸(1990)と同様、「ノだ」の働きは前接命題と先行文との関連を示すことにあると考えるため、「文脈関連」と「ノだ」の必要性についてまず次のように予測する。

- (3) 仮説1: 「ノだ」の前接命題と先行文との「文脈関連」が間接的で不明であればあるほど、「ノだ」による「結びつけ」が必須になる。それゆえ、
- (4) 仮説2: 応答文が直接的な場合、「ノだ」は必須でないが、
- (5) 仮説3: 応答文が間接的な場合、「ノだ」は必須である。

以上の仮説を本論で検証するが、「ノだ」の必須度をより客観的に把握するために、言語学専攻でない筑波大学女子学生20~25人を対象にアンケート調査を行うことにした。アンケートでは、直接的な「ノだ」文と間接的な「ノだ」文を提示し、それらの文が「ノだ」がなくても自然な非「ノだ」文になるかどうかを調べる。回答者は「ノだ」文と非「ノだ」文それぞれの自然さを判断し、“①全く不自然”、“②どちらかと言えば不自然”、“③どちらかと言えば自然”、“④全く自然”のどれかを答えとして選ぶ。その判定の傾向を把握するために、主に①~④の選択肢の中でどれが一番多く選ばれるかを考察するが、この方法で判定の差が明らかでない場合、補助的な手段として、各選

択肢を選んだ回答者のパーセンテージや①～④の択肢をそれぞれ一点から四点と換算しそれによって求められる平均値を調べることによって回答者の判定をさらに確かめる。以上の結果に基づきながら、筆者は各用例について“？”や“??”を付けるかどうかということを総合的に判断する。次に、実際の調査結果も示しながら筆者の判断による分析を述べる。

3. 「文脈関連」の直接／間接さと「ノだ」の必要性との相関

「ノだ」を用いた直接的な応答文と間接的な応答文とは四種類に分けることができる。以下、それらの例を確認した上で仮説1～3を検証し、それぞれの文にある「ノだ」が必要かどうかを見ていく。

3. 1. 確認文に対し同じレベルで否定するより直接的な答えとそうでないより間接的な答え

(6) (対談で理想的な結婚生活について聞かれ、忙しいときは夫に料理を作ってほしいと言った女優の桃子)

編集部 桃子さんは、お料理は得意ですよ。

桃子 (6a) いえ、下手なんです。[注6]

「お料理は得意ですよ」という確認文に対し、「いえ、下手～」のような答えは直接的である。「下手」が「得意」であることを能力という同じ観点から直接否定するため、「いえ、下手～」と確認文との結びつきが明らかなのである。また、同じ角度から否定するわけではないが、

(6b) いえ、得意っていうより、好きなんです。

(6c) いえ、好きなだけなんです。

もまた確認文との結びつきが明白な応答文である。レベルをずらしてではあるが確認文

の命題を否定しているということが「～っていうより」と「～だけ」によってはっきりと表されている。

一方、

(6d) いえ、好きなんです。

のような答え方は間接的である。「好き」は「得意」を同じレベルで直接否定する言葉ではないし、また故意に別のレベルで否定しているということも明示されていないため、「いえ、好き」であることと確認文とのつながりは不明なのである。

仮説2と3に従えば、「文脈関連」がより直接的または明白な(6a)～(6c)の場合「ノだ」は必要でないが、関連がより間接的しかも不明な(6d)には「ノだ」が必須である。実際アンケートの結果では、直接的な(6a)～(6c)から「ノだ」がなくなっても文は

(6e) いえ、下手です。 ④

(6f) いえ、得意っていうより、好きです。 ④

(6g) いえ、好きなだけです。 ④

のように自然に言えるが、間接的な(6d)から「ノだ」がなくなれば文は

(6h)? いえ、好きです。 [注7] ①

のように落ち着かなくなる。アンケートで最も回答の多かった選択肢の番号を各例文の最後に示してあるが、(6e)～(6g)の場合“④全く自然”が最も多かったのに対し、(6h)の場合“①全く不自然”が最も多かったのである。

3. 2. 質問に対して同じ前提で答える直接的な答えとそうでない間接的な答え

(7) (対談の冒頭で)

三宅 いやあ、あつという間に秋になってしまいましたね。秋っていえば、やっぱり食べ物ですけど、桃子さん、何がお好きですか。

桃子 (7a) 柿が好きなんです。

「何がお好きですか」に対し「～が好き～」のような答えは直接的である。質問では「(秋の食べ物の中で)何か比較的好きな食べ物がある」というのが前提であって、「お好き」が「何」に対して相対的な旧情報であるが、(7a)の方も同じ「好き」で答え同じ前提に基づいているため、質問に直接対応しているのである〔注8〕。

一方、

(7b) 柿が好物なんです。

(7c) 私、柿が好物なんです。

のような答え方はやや間接的である。質問で問われているのが「お好き」であるのに対し応答文の方が「好物」であるため、両者の内容が少しずれているのである。質問では秋の食べ物について「何」が比較的好きなのかを聞いているが、返事の方はその「何」に対して単純に答えない。むしろ話し手の一般的な好みについてあらゆる食べ物の中で話し手が何を特別に好むかという話を自ら持ち出している。「好物」と「お好き」が意味的に重なる部分もあるため、応答文の前提を「好物」にずらしてもこの質問に対して全く答えにならないということはないが、やはり直接かみ合う返事とは思われない。特に(7c)の場合、言わなくても自明だし質問に答えるためにも全く必要のない「私」までわざわざ取り立てられているということから、話し手が単に質問に答えたいというより自分について何か質問に関連しなくもないような話を切り出したいということが一層はつきりしている。(7b)も質問と前提がずれており答えとして間接的であるが、「私」の付いた(7c)はそれよりもっと間接的である。

仮説2と3に従えば、質問に直接対応する(7a)に「ノだ」は必要でないが、直接対応しない(7b)と(7c)には「ノだ」が必須である。実際調査結果を見ても、仮説2と3が妥当であることが分かる。直接的な(7a)から「ノだ」を省略しても文は

(7d) 柿が好きです。 回答の平均値3.6 [④の回答=全体の60%]

のように問題なく言えるが、間接的な(7b)と(7c)から「ノだ」を取れば文は次の(7e)と

(7f)のように(やや)不自然になる。

(7b) 柿が好物なんです。 回答の平均値3.5 [④の回答=全体の60%]

(7e) ? 柿が好物です。 回答の平均値3.0 [④の回答=全体の24%]

(7c) 私、柿が好物なんです。 回答の平均値3.8 [①②の回答=全体の0%]

(7f)? ? 私、柿が好物です。 回答の平均値2.6 [①②の回答=全体の44%]

直接的な(7d)の回答の平均値が 3.6 もあるのに対し、間接的な(7e)と(7f)の平均値はそれより低く 3.0 と 2.6 しかない[注9]。(7b)の「柿が好物なんです」から「ノだ」がなくなれば“④全く自然”の回答が全体の 60% から(7e)の 24% まで大きく落ちるし、(7c)の「私、柿が好物なんです」から「ノだ」を省けば、元々ゼロであった“①全く不自然”と“②どちらかと言えば不自然”との回答が(7f)のように全体の 44% にも増えてしまう。「柿が好物～」より「私、柿が好物～」の方が答え方として間接的だということを前に述べたが、実際「ノだ」がない場合、両者の回答の平均値は 3.0 と 2.6 であり、前者より後者の方がより不自然であることが分かる。「文脈関連」が間接的であればあるほど「ノだ」が必要だということがここでも裏付けられている[注10]。

もう一つ例を見てみる。

(8) (対談で関西の話をしていたら大阪の話が出た)

三宅 大阪っていえばたこ焼きが美味しいって評判ですけど、桃子さん、
たこ焼きお好きですか。

桃子 (8a) ええ、たこ焼きは好物なんです。昔から、「何が好きなの？」
って聞かれると、いつも「たこ焼き」とかって言ってたんで
すよ!

「たこ焼きお好きですか」に対し「ええ、たこ焼きは～」のような答え方は直接的である。質問で「たこ焼き」が相対的な旧情報でそれについて「好き」かどうかが新情報として求められているのに対し、(8a)では同じ情報の新旧すなわち焦点と前提が保たれている。「たこ焼き」が文の主題として前提すなわち旧情報のままで表されているし、

「好物」も質問で求められた通り文の解説部で焦点または新情報を示している。

一方、

- (8b) ええ、好物はたこ焼きなんです。昔から、「何が好きなの？」って聞かれると、いつも「たこ焼き」とかっていってたんですよ！

のような答え方は間接的である。質問では「たこ焼き」が前提で「好き」かどうか焦点であったが、(8b)では前提であった「たこ焼き」が文の解説として焦点に変わるし、焦点となるはずの「好物」が文の主題として前提になっている。本当はたこ焼きについて好きかどうか聞かれているのに、返事の方は逆に「好物」について「好物と言えばたこ焼きだ、たこ焼きだけが好物だ」というような話を一方的に始めるため、質問と食い違ってくるのである。もちろん、「～だけが好物だ」ということから「大好きだ」ということも分かるため、質問に対し「ええ、好物は～」と言うのも一つの答え方ではあるが、やはり直接的または単純な返事とは言えない。

(8a)と違って(8b)が答えとして間接的であることは、次の(8c)と(8d)との違いや(8e)と(8f)との違いからも裏付けられる。

- (8c) たこ焼きは好物なんです。昔から、……っていってたんですよ！ ④
(8d)? 好物はたこ焼きなんです。昔から、……っていってたんですよ！ ②

(8a)の「ええ、たこ焼きは～」は「ええ」がなくても(8c)のように自然に言えるが、(8b)の「ええ、好物は～」は「ええ」を失えば(8d)のようにおかしくなる。アンケートで(8c)について“④全く自然”の回答が最も多いのに対し、(8d)の場合“②どちらかと言えれば不自然”が最も多かった〔注11〕。また、

- (8e) ええ、たこ焼きは好物なんです。 ④
(8f)? ええ、好物はたこ焼きなんです。 ②

で分かるように、(8a)は「昔から～」の後続文がなくても(8e)のように“④全く自然”に言えるが、(8b)はあとに何の説明もない場合(8f)のように“②どちらかと言えれば不自然”

然”になってしまう。質問に直接対応する返事であれば、本来(8a)のように、「ええ」がなくても質問に答えているということがはっきりするし、また後続文がなくてもそれだけで十分答えになるはずであるが、(8b)にはそれができない。つまり、それだけ「好物は～」という答え方がそもそも質問に単純に答えていないということである。

仮説2と3に従えば、応答文として直接的な(8a)に「ノだ」は必要でないが、間接的な(8b)には「ノだ」が必須である。実際次の(8g)と(8h)がそれを証明している。

(8g) ええ、たこ焼きは好物です。昔から、……っていったんですよ！ ④

(8h)? ええ、好物はたこ焼きです。昔から、……っていったんですよ！ ②

直接的な(8a)から「ノだ」を除いた(8g)はそれでも“④全く自然”であるが、間接的な(8b)から「ノだ」を省いた(8h)は“②どちらかと言えば不自然”である。

3. 3. 質問から情報を受けたことがはっきりする直接的な答えとそうでない間接的な答え

- (9) (対談で香菜の話をしていたら、タイで毎日食べていたと向田が言った)
- 阿川 タイっていえば何でも辛いけど、向田さん、辛いもののお好きですか。
- 向田 (9a) 私、辛いものは大好きなんです。昔から、「どういうものが好きなの?」って聞かれると、いつも「辛いもの」っていったんですよ。

「辛いもののお好きですか」に対し「私、辛いものは～」のような返事は直接的である。「辛いもの」は質問に既出の旧情報であるが、(9a)でも「ハ」と共に文の主題すなわち文中の相対的な旧情報として表されている[注12]。(9a)で話し手が質問の内容を踏まえながらそこにあった「辛いもの」について述べているということがはっきりし、質問とのつながりが明らかである。

一方、

- (9b) 私、辛いものが大好きなんです。昔から、「どういうものが好きなの?」

って聞かれると、いつも「辛いもの」っていったんですよ。

のような返事は間接的である。ここで「辛いもの」は、質問に既出であるにも関わらず「ガ」を伴って新情報として表されている。答えが質問と同じ「辛いもの」を共有しているということが全く示されていないため、(9b)はまるで質問と関連のない叙述のような形を取っている。質問では「辛いもの」について「好き」かどうかということだけを新情報として求めているが、返事の方はそれに応じずに、「大好き」ばかりか「辛いものまで「私」に関する新情報の一部として提示している。つまり、(9b)は質問とかみ合わないのである。

(9a)と違って(9b)が質問と直接結びつかないということは、次の(9c)と(9d)を比べれば一層明らかになる。

(9c) 辛いものは大好きなんです。昔から、……っていったんですよ。 ④

(9d)? 辛いものが大好きなんです。昔から、……っていったんですよ。 ②

「～辛いものは～」の場合、文頭に「私」が付いていなくても(9c)のようにアンケートで“④全く自然”の回答が最も多いが、「ハ」を「ガ」に変えれば今度“②どちらかと言えば不自然”の回答が最も多くなる〔注13〕。これは、既出の「辛いもの」をわざわざ新情報として述べる場合、それが好きであることの叙述を質問と関連づけるためには叙述の対象となる「私」のようないわば接着剤とでもいうべきものが必要であることを示していると思われるが、言い換えれば、それは「辛いものが～」が本来質問に直接つながらないということでもあるだろう。

仮説2と3に従えば、質問により密接につながる(9a)は「ノだ」を必要としないが、そうでない(9b)は「ノだ」を必要とする。実際次の(9e)と(9f)がそれを裏付けている。

(9e) 私、辛いものは大好きです。昔から、……っていったんですよ。 ④

(9f)? 私、辛いものが大好きです。昔から、……っていったんですよ。 ②

(9a)から「ノだ」をとっても文は(9e)のように“④全く自然”に言えるが、(9b)から「ノだ」を外せば答えは(9f)のように“②どちらかと言えば不自然”になってしまう。

3. 4. 相手の発言を「ええ」で肯定する直接的な答えとそうでない間接的な答え
厳密に言えば、次に示す例文(10)は、例文(6)と違って「ヨネ?」や「デシヨウ?」などによって相手にはっきりと確認を要求する文ではない。しかし、実際「～さんは、なにしろ食べることに好きらしいから」と言われればやはりそれに対して何らかの反応(肯定または否定)を示すのが普通だと思われるため、本稿ではこのような文も確認文の一種として扱う。

(10) (対談で、好きな料理は何かと聞かれてベトナム料理を挙げた阿川)

阿川 ベトナム料理って実にうまいものですよ。ニョクマムっていう調味料に何でもちよつとつけて食べるんです。

向田 ああ、日本のしょつするに似たものですね?

阿川 やっぱよく知ってらっしゃる。向田さんは、なにしろ食べることに好きらしいから。

向田 (10a) ええ、私は正真正銘の食いしん坊なんです。

「～食べることに好きらしいから」に対し「ええ、～食いしん坊～」のような応答文は直接的である。(10a)で話し手が相手の発言を肯定しているということが「ええ」によって明示されているため、先行確認文との関連が明らかである。

一方、

(10b) 私は正真正銘の食いしん坊なんです。

のような返事はやや間接的である。「ええ」のない(10b)は、先行文に対して肯定しているというより、形の上ではただ話し手が正真正銘の食いしん坊である事実を相手に伝えているだけなのであり、先行文とのつながりが必ずしもはっきりしないのである。

仮説2と3に従えば、先行文との関連がはっきりする(10a)に「ノだ」は必須でないが、そうでない(10b)には「ノだ」が必要となる。実際、

(10c) ええ、私は正真正銘の食いしん坊です。 ④

(10d)? 私は正真正銘の食いしん坊です。 ②

(10a)から「ノだ」を省略した(10c)はそれでも十分自然な返事になるが、(10b)から「ノだ」を除いた(10d)は不適切な答えである〔注14〕。

以上、例文(6)～(10)を通して仮説1～3の検証を行ってみた。その結果、仮説1～3が成立し、一対一の対話の場合、先行文に対して答えが間接的であればあるほど「ノだ」が必須になり、「文脈関連」によって「ノだ」の必要性が決まってくるということを確認した。

4. 「結びつけ」機能を果たす「ノだ」

4. 1. 「結びつけ」機能で用いられなくなる「ノだ」

前章の結果から、「ノだ」に先行文脈との「結びつけ」機能があるということが既にはっきりしているが、次の現象がそれをさらに裏付ける。

(10) (対談で、好きな料理は何かと聞かれてベトナム料理を挙げた阿川)

阿川 ベトナム料理って実にうまいものですよ。ニョクマムっていう調味料に何でもちよっとつけて食べるんです。

向田 ああ、日本のしよっつるに似たものですね？

阿川 やっぱりよく知ってらっしやる。向田さんは、なにしろ食べること好きらしいから。

向田 (10e) 食いしん坊なんです。 ④

(10f)? 好きなんです。 ①

「～食べること好きらしいから」に対し、「食いしん坊なんです」は言うが、「好きなんです」はあまり言わない。前者について“④全く自然”の回答が最も多いのに対し、後者の場合“①全く不自然”が最も多い。しかし、先行文が「～好きらしいから」ではなく、「～目がないらしいから」などのようなものであれば、次の(11a)に見る通り、

(11) (対談でキムチの作り方の秘訣について相手に話してみたら、相手の方がもっと詳しいような感じであった)

阿川 やつぱりよく知ってらっしゃる。向田さんは、何しろキムチには目がないらしいから。

向田 (11a) 好きなんです。 ④

「好きなんです」という答えでも全く自然である〔注15〕。これは、応答文と先行文が内容だけではなく表現まで直接対応し、先行文との「結びつけ」が最初から必要がないしまたそういった特別な表示の介在する余地もないような場合、「ノだ」が不適切であることを表している。この制限こそ「ノだ」の「結びつけ」機能を逆に窺わせてくれるのである。

4. 2. 他の機能では説明しきれない必須の「ノだ」

「ノだ」の本質については従来いろいろな説がある。以下では、それらの説を紹介し、それでもやはり「結びつけ」機能でなければうまく説明できない必須の「ノだ」があるということを主張する。

まず、佐治(1981)の「確認説」であるが、それによれば、「ノだ」は前接命題にある「判断を確かなものとして認定」し、「客観的な真実として述べる」「確認の表現」であるという(p.6,p.5)。似たようなことが水野(1990)の「真命題説」や草薙(1991)の「客観化説」でも言われている。水野(1990)では、「ノだ」の基本的な機能は「話し手がある命題を真であると認識していることを明示することにある」(p.41)としているし、草薙(1991)では、「ノだ」はあることを「事実」として述べる「客観的な表現」(p.54)だと主張している。また、田野村(1990)には、「ノだ」によってある「既定」の事柄が「実情」もしくは「背後の事情」として表されることになるという指摘もある(p.10)。

しかし、例文(6)～(11)を振り返ってみれば分かるように、佐治らの説ではまだ十分説明できない「ノだ」文がある。例えば、例文(6)の場合、「お料理は得意ですよね」に対し答えが「いえ、下手～」であれば「ノだ」は必要でないが、答えを「いえ、好き～」に変えれば「ノだ」が欠かせなくなる。これを「確認説」や「真命題説」の立場から説明するとすれば、「いえ、好き～」の場合に限ってそれが「真実」であることをことさら「確認」しなければならないからだということになると思われるが、なぜ「好き」の場合にだけそうする必要があるのか、なぜ「下手～」であればそう「確認」しなくてもよくなるのかといった疑問点が残る。

また、例文(9)の場合、「辛いもののお好きですか」に対し「私、辛いものは大好き～」と言っても、また「私、辛いものが大好き～」と言っても、命題内容が同じ「辛イモノガ大好きデアルコト」になるわけであるから、事柄の「客観性」といい「既定性」といい両者には何ら差がないはずであるが、実際には前者には「ノだ」の必要がなく後者には「ノだ」が不可欠である。この違いを「客観化説」や「既定説」で説明するのは無理だと思われるし、また「私、辛いものが～」で「ノだ」が用いられているのは「客観性」と「既定性」を表すためだというのも考えにくい。

最後に例文(10)であるが、「～さんは、なにしろ食べることに好きらしいから」に対し「ええ、私は正真正銘の食いしん坊～」と答えれば「ノだ」がなくても自然であるが、「ええ」がなければ「ノだ」は欠かせなくなる。「私は正真正銘の食いしん坊～」は、そもそも「ええ」がなくても「食べることに好きらしい」の「背後の事情」として十分成り立ちうる内容であるため、「ええ」がない場合「ノだ」が用いられしかも必須となるのが「背後の事情」を表すためだというのは考えられない。

このように、例文(6)～(11)について「ノだ」の必要性を説明する場合、上記の諸説より「文脈関連」や「結びつけ」機能の方がより有効な説明ができるのである。

5. 「ノだ」による「結びつけ」の特徴

最後に、「ノだ」による「結びつけ」の特徴について Sperber and Wilson (1986) から始まった Relevance Theory の観点から少し考察を加える[注16]。

この Relevance Theory については Blakemore(1992) がかなり詳しく取り上げているが、それによると、Relevance Theory とは the principle of relevance によって言語理解のメカニズムを解明しようとする理論である。The principle of relevance によれば、対話の場合聞き手は常に話し手の発話が“optimally relevant”(p.37)であって、最低限必要な操作(“the minimum necessary processing”)で適切な文脈的な効果(“adequate contextual effects”(p.36)が得られるものと想定するという。そのため、コミュニケーションがこの前提で行われた場合、たとえ相手の発言が先行文に直接結びつかなくても、聞き手はそれを直ちに不適切な発言と見なしたりはしない。むしろ関連があることが既に前提となっているため、聞き手はその文の持つ文脈的な効果や意

味について積極的に推論するのである。

このような Relevance Theory の観点からすれば、「ノだ」は正にある発話が optimally relevant であることを想定しやすくするような効果をもたらす形式である。例文(6)～(11)でも考察したが、応答文と先行文が内容的にはっきりと結びつかない場合、応答文に「ノだ」がなければ聞き手はただそれを不適切な発話とすぐ見なすだけでその文が持ち得る文脈関連については積極的に考えようとしなが、「ノだ」が付けば文が先行文に関連しているということが「ノだ」の「結びつけ」機能によって明らかになるため、聞き手も安心して、推論をすればそれだけ発話の理解に役に立つ文脈的な関連や意味が分かるのだと思うようになる。つまり、「ノだ」によって optimal relevance が想定しやすくなるのである。Optimal relevance とは本来「ノだ」でしか表せないような狭い概念ではないが、「ノだ」の「結びつけ」機能にはそれを想定しやすくし言語理解を助けるような副次的派生的な特徴があると言える。

6. 今後の課題

まず、「ノだ」はなぜ直接結びつかない先行文と応答文でも「結びつけ」られるのかという問題がある。これについては国広(1992)で言う話し手の「“主観的な判定”」(p.19)という概念が示唆的だと思われる。国広(1992)では、「ノだ」の意義素について、話者が「現状を認知」した上でそれと「関連がある」「既定命題」(p.19)を提示するというように規定し、特に「関連性」についてそれを判定するのはあくまで話し手だということを強調している。この考えを敷えんすれば、ある発話がたとえ先行文に直接結びつかなくても、話し手がそれで答えとして適切だと思えばそれを答えとして出すこともあるということになる。もし聞き手がこのようなことを前提としていないとすれば、応答文と先行文が一見つながらない場合、聞き手はそう簡単に文脈関連があるとは見なせないだろう。この点については更に追究する価値がある。

次に、「ノだ」が持つ様々な用法の説明であるが、それには「結びつけ」だけでは不十分ではないかという問題もある。例えば、次に示す(8i)の場合、「ノだ」は「結びつけ」機能ではなく、それこそ水野(1990)の主張した、ある命題が真であることをことさら認定するような働きを持つのではないと思われる。

(8) (対談で関西の話をしていたら大阪の話が出た)

三宅 大阪っていえばたこ焼きが美味しいって評判ですけど、桃子さん、
たこ焼き好きですか。

桃子 (8i) ええ、好きなんです。 ④

(8j)? 好きなんです。 ②

(8k) 好きです。 ④

(8l) 好物なんです。 ③

応答文に「ええ」がなくしかも述語が(8j)の「好き～」のように質問と一致している場合、「ノだ」による「結びつけ」が全く介在できないため「ノだ」を伴うことはできない。しかし、(8i)のように文頭に「ええ」が加われれば、今度は「ノだ」文でも自然である。「ええ」がある場合、聞き手はその「ええ」で「好きだ」ということを一度認めたことになり、その後の「好き～」はただそれをさらに認定し肯定することになるが、そのような「好き～」にこそ用いられる「ノだ」というのは正にその命題が真であることを「認定」していると思われる。

また、

(12) (義彦が自分の劇団のリハーサルに友だちのさと子を連れてきた。二人はステージの下で見ている。セリフの中におかしな名前が出たため、さと子は忍び笑いをしてしまった)

義彦 (12a) 名前はおかしいけど、真面目な芝居なんだ。

(12b)? 名前はおかしいけど、真面目な芝居だ。

(12c) 名前はおかしいけど、真面目な芝居だよ。

さと子 なんていうんですか。

(『あ・うん』 p.258)

では、上昇調で言う終助詞の「ヨ」があれば「ノだ」は任意であるが、「ヨ」がなければ「ノだ」は必須になる。(12a)では発話と先行状況とのつながりが「名前はおかしいけど」によって既に明示されているため、そこにある「ノだ」は「文脈関連」を示しているとは思われず、むしろ「真面目な芝居」であることを相手に押し付け認識させようと

しているように思われる。このような「ノだ」は、「聞き手目当ての働きかけ」とでもいうべき一種の終助詞的な機能を果たしているのではないかと考えられる。「ノだ」に複数の意味機能が認められるとすれば、どこまでが意味論的でどこからが語用論的なのかということも当然問題となってくるが、これも含めて今後さらに考察したいと思う。

最後に、本稿では先行文と応答文との関連を中心に必須の「ノだ」について考察したが、後行文と「ノだ」との関連や任意の「ノだ」が持つ意味機能についても分析する必要があるだろう。

7. まとめ

本稿では、寺村(1984)や小金丸(1990)を補う形で「ノだ」を「文脈関連」と「結びつけ」機能の観点から考察した。アンケートでは、応答文と先行質問文や確認文との結びつきが間接的または不明であればあるほど「ノだ」が必要だという結果が得られ、「ノだ」に「結びつけ」機能がありしかもそれでは説明できない「ノだ」もあるということが明らかになった。また、「結びつけ」機能について、Relevance Theoryで言うところの optimal relevance を想定しやすくするような副次的な特徴があるということも指摘した。

【注】

- *) 本稿の執筆にあたっては、筑波大学の草薙裕先生、沼田善子先生、橋本修氏、園田学園女子大学の野田春美氏、大阪外国語大学の筒井佐代氏、東京外国語大学外国語学研究所の藤光由子氏、そして筑波大学文芸言語研究科の牧原功氏と野村美穂子氏から大変貴重なご助言を賜った。特に野村美穂子氏は原稿に何度も目を通してくださりいろいろ励ましてくださった。また、アンケート調査の実施に関しては筑波大学外国語センターのサントニ先生からも多大なご協力をいただいた。以上の方々には厚く御礼申し上げたい。
- 1) 「ノだ」や「ノです」において、共通の「ノ」の部分とそれに後続するさまざまな形式とを区別するため、本稿では「ノ」をカタカナで表記する。
 - 2) ここで言う「必須」は、あくまで協力的な会話であればあった方がより自然だという意味であり、「行くのではない」から「の」がなくなれば文法的でなくなる

いう意味ではない。

- 3) 先行研究に小金丸(1988)の「問答文におけるノダの使用条件」があるが、次の三点において本稿と違う。
 - a) 小金丸(1988)では、確認文に対する応答文を取り上げていない。
 - b) 小金丸(1988)では、非「ノだ」文によるWH質問文として、発話時における応答者の意志・感情・意見を聞く質問文と、「～ハ[疑問詞]デスカ」の形をした質問文とを取り上げているが、本稿ではそれ以外のWH質問文に対する応答文を対象とする。
 - c) 小金丸(1988)では質問に直接答える応答文について論じているのに対し、本稿では、むしろ内容的に質問と間接的な関係にある応答文に注目する。
- 4) 三上(1953)以来、「命題」という用語が「行くんだ」の「行く」の部分に対して使われてきた。
- 5) 談話のレベルで「ノだ」によって「結びつけ」ができるのは、「ノ」が文法的に準体機能を持つからだと言われている。詳しくは寺村(1984)や小金丸(1990)を参照。
- 6) 出典を示していない例文は、すべて対談集等の中に掲載されていた文に筆者が手を加えた作例である。
- 7) 「？」はアンケートの結果に基づいて当の応答文が不自然だと筆者が判断したことを示す。なお、例文(6)については20人がアンケートに答えた。
- 8) Gundel(1988)によれば、情報の新旧は relational なものと referential なものに分けられるという。Relational とは文の中である情報が相対的に新であるかどうかのことであるが、referential とはある事物が聞き手の知識や意識に既にあるかどうかのことである。例文(7)で言う「前提」は Gundel(1988)の relational な旧情報に相当する。
- 9) 例文(7)については25人がアンケートに答えた。
- 10) (7d) 柿が好きです。 回答の平均値3.6 [①②の回答=全体の0%]
(7g) 私、柿が好きです。 回答の平均値3.3 [①②の回答=全体の12%]
(7f)? 私、柿が好物です。 回答の平均値2.6 [①②の回答=全体の44%]

「私」の付加で応答文がより間接的になるのは、質問と前提が一致しない「～が好物～」の場合だけではなく、前提が一致する「～が好き～」の場合でも同じである。調査の結果が示しているように、非「ノだ」文の場合(7d)の「～が好き～」より「私」が付いた(7g)の方が回答の平均値がやや低い。しかし、(7f)の「私、～が好物～」と比べれば分かるように、(7g)は「私」が付いていてもかなり自然でそれほど「ノだ」を必要としないのである。答えに直接貢献しない「私」のような要素の有無も応答文の間接さや「ノだ」の必要性にやや影響するようであるが、それより質問と前提が一致するかどうかの方がもっと強力なファクターなのである。

- 11) 例文(8)についてアンケートの回答人数は25人である。
- 12) Gundel(1988)の用語で言えば、(9a)にある「辛いもの」は、質問に既出の referential な旧情報でもあるし、と同時に文中の前提情報を表す relational な旧情報でもある。
- 13) 例文(9)については23人がアンケートに答えた。
- 14) 例文(10)のアンケートの回答人数は20人である。
- 15) 例文(11)はアンケートとは別に少数のインフォーマントに聞いた。
- 16) Relevance Theory と「ノだ」との関連については、姫路獨協大学の連沼昭子先生の指摘を受けた。

【参考文献】

- 草雑裕. (1991)『日本語はおもしろい』. 講談社.
- 国広哲弥. (1984)「『のだ』の意義素覚え書」. 『東京大学言語学論集'84』. 東京大学文学部言語学研究室.
- . (1992)「『のだ』から『のに』・『ので』へ——『の』の共通性——」. 『日本語研究と日本語教育』. 名古屋大学出版会.
- 小金丸春美. (1990)「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」. 『日本語学』, 1990年3月号.
- 佐治圭三. (1981)「“～のだ”の本質」. 『日語学習と研究』, 3. 北京对外経済貿易大学.
- . (1989)「『のだ』の本質を求めて—再び山口佳也氏に答えて—」. 『阪大日本語研究』, 1. 大阪大学文学部日本学科.
- 砂川有里子. (発行予定)「日本語における分裂文の機能と語順の原理」. 『複文の研究』(仮題). くろしお出版.
- 田野村忠温. (1990)『現代日本語の文法Ⅰ』. 和泉書院.
- 寺村秀夫. (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』. くろしお出版.
- 野田春美. (1993)「『のだ』と終助詞『の』の境界をめぐって」. 『日本語学』, 1993年10月号.
- 三上章. (1953)『現代語法序説——シンタクスの試み——』. くろしお出版(1972復刊).
- 水野直美. (1990)「『のだ』の語用論的特性に関する研究」. 名古屋大学修士論文.
- Blakemore, Diane. (1992) Understanding Utterances. Oxford: Blackwell.
- Brown, G. and George, Y. (1983) Discourse Analysis. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gundel, Jeanette K. (1988) “Universals of Topic-comment structure.” In M. Hammond et al. (eds.), Studies in Syntactic Typology, 209-239. Amsterdam: John Benjamins.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986) Relevance: Communication and Cognition. Oxford: Blackwell.

The relationship between contextual relevance and “NODA”

----- “NODA” necessary for giving answers

Yung Pui King

The objective of this paper is to illustrate “NODA”’s function of indicating contextual relevance. This is shown by the examination of the relationship between questions and answers, as well as that between requests for confirmation and answers. It was found that when answers do not correspond to questions or requests for confirmation directly in either their content or information structure, “NODA” becomes necessary, not to confirm that propositions are true, as some former studies have argued, but to relate answers to the preceding context. The paper then discusses “NODA” in the light of Sperber and Wilson’s Relevance Theory (1986) and concludes that “NODA” has the effect of facilitating the understanding of utterances by allowing addressees to assume more easily that the utterances are “optimally relevant” .